

街路樹のまちづくりへの影響に関する考察 福岡市けやき通りを事例として

羅大芳

1. 目的

日本における街路樹の歴史は、明治初年の神戸、横浜、東京など外国人居留地の周辺に、シダレヤナギ、マツなどが植えられて以来、100年を超えている。しかし、戦後の日本では、急激に進むモータリゼーションに対応するため、道路整備は交通の迅速な処理と安全対策重視のものとなり、街路樹はすっかり人々の視界から外れてしまった。ところが、道路環境問題の高まりとともに、騒音や排気ガスなどの対策として、沿道住民の生活環境保全のための緑化が積極的に行われるようになった。建設省では、昭和48(1973)年の「第七次道路整備五箇年計画」において、道路整備上の最重要課題として緑化をとりあげた。

都市部の道路では、道路の交通機能及び構造との調和をはかりながら、道路にできるだけ多くの緑を導入し、災害及び公害防止はもとより、生活に憩いと潤いを与えることが必要であると認識されている。以上の観点に基づいて、建設省の都市緑化のための植栽五箇年計画(1981)や、東京都の緑の倍增計画(1984)をはじめ、各都市の緑化計画に、街路樹植栽は多くな地位を東京都の緑の倍增計画(1984)をはじめ、各都市の緑化計画に、街路樹植栽は多くな地位を占めているのである。

このように、道路整備において街路樹は道路緑化の観点から重要視され、量は確実に増加している。街路樹によりどのような空間にするのか、どんな地域づくりをするのかという点は十分に検討されているとは言えない。

そこで本論文では、新日本街路樹100景や福岡市都市景観賞を受賞して、建設省の「やさしさ推進事業」として選定された、福岡市を代表する並木道であるけやき通りを研究対象として、街路樹を活かしたまちづくりの事例研究を行う。けやき通りは国体道路の一部であり、福岡市の

都心部に位置する。天神地区の近くにあり、福岡城址や文化・スポーツ施設へつながる地方幹線道路である。(図-1参照)

本研究は、文献調査や関係者へのヒアリング調査を通じてけやき通りと沿道地域の変遷やまちづくり活動における街路樹の役割を調査することで、街路樹のまちづくりへの影響を考察し、道路整備における街路樹のあるべき姿を明らかにすることを目的としている。

2. 内容

2-1. けやき通りの歴史変遷

けやき通りと沿道のまちづくり活動の変遷は以下のように4つの時期に区分できる。

(1) 黎明期(1948~1980)

国体道路整備

けやき通りの位置する場所は城下町であり、江戸時代には商業が集積していた町であった。明治以降、天神地区の隆盛とともに商店街の形を徐々に失ってきた。

戦災復興の一環として、昭和23(1948)年の第3回国民体育大会を誘致した際、福岡城の南側を東西に走る国体道路が整備された。戦後の混乱からようやく復興を遂げつつあったこの時代、国体道路の整備は経済発展へ向けての象徴であったとも言える。

けやき並木の整備

福岡市が昭和32(1957)年度から市街地緑化運動3カ年計画を実施した。昭和33(1958)年4月、天皇皇后両陛下が大分の植樹祭に御出席



図-1 けやき通り位置

の後九州を一巡された際に、両陛下の御巡行コースになった 50 メートル道路 (昭和通り) は市街地緑化運動の最初の事業に取り上げられた、道路の両側にグリーンベルトを設置した。赤坂門から六本松までの国体道路 (けやき通り区間) にも同計画により、歩道にけやき、かえで、やまざくら、やなぎなどが植えられた。昭和 58 (1983) 年、けやき通りのけやき以外の樹種を移植して、かわりにけやきを補植した。

名付け

昭和 47 年頃に、赤坂付近の国体道路に店を開いた白水規雄さんは昭和 50 (1975) 年代前半から仲間のうちで、赤坂付近の国体道路のことをけやき通りと最初に呼ぶようになった、これが「けやき通り」と呼ばれた最初であり、その後どんどん広まっていった。

(2) 成長期 (1981 ~ 1987)

マンション建設

昭和 50 年代後半になると、用地不足、单身世帯を含む少人数世帯の増加から、けやき通り周辺にマンション建設が活発になった。その理由は国体道路が走り、天神地区のすぐ近くにあるという好立地にありながら、大型商業施設もない、割安感のある地域であった。建設されたマンションの 1, 2 階のテナントは、しゃれたブティックや飲食店が入居していた。このようなマンションの代表と言えるのはけやき通りの中央部に建てられたシャトレけやき通り (福岡市第 1 回都市景観賞受賞) である。「このマンションが誕生してから、周囲の建物が同系色に統一され、けやき並木と調和した街並みとなった。(福永博建築研究所著『300 年住宅』により)

商店街のまちづくり活動

昭和 59 (1984) 年、「警固・赤坂・六本松・けやき通り商店会」が設立し、商店会が主体となったまちづくり活動を始めた。しかし、従来からの商店と新しく出店した店とのまちづくりに対する取組みの微妙なずれがあった。さらに、商店街が広域すぎて、密度が十分でないために、商店街全体としての一体感がなく、商店街とい

うイメージ自体が弱かった。商店会では、けやき通りが持つファッションストリートとしての属性のうち、若者が集まる街ということを重要視することとし、「けやき通りイベント ' 86 」昭和 61 (1986) 年に始め、それ以来この企画は毎年 5 月の連休に行われていた。このような努力により、けやき通りに行けば何か新しいものがあるという意識が若者の間では定着していった。

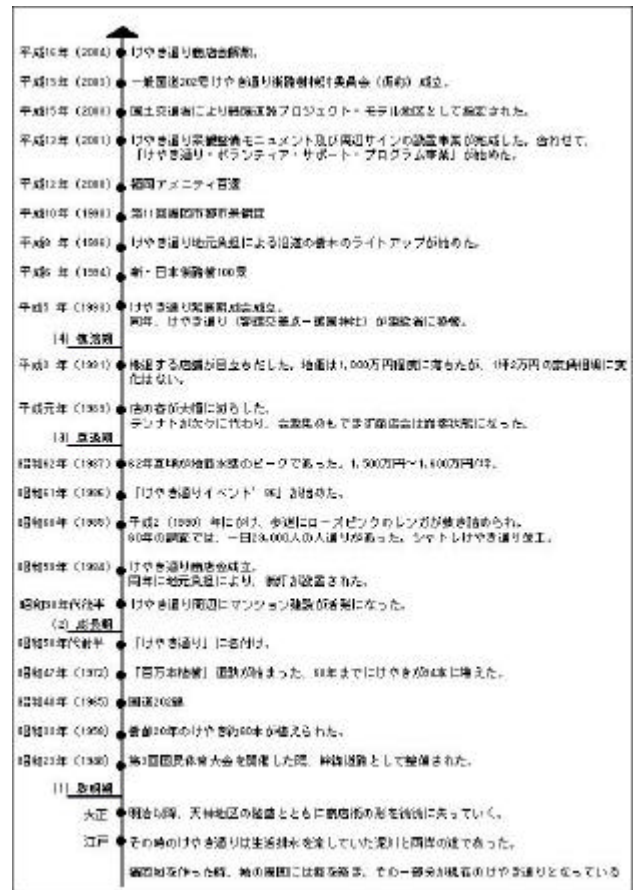


図-2 けやき通り歴史変遷

歩道整備

昭和 60 (1985) 年から平成 2 (1990) 年にかけて、福岡市の「ふれあい道路」事業により、けやき通りの歩道にローズピンクのレンガでカラー舗装し、随所に黒っぽい木製レンガが埋め込まれた。

地価のピーク

昭和 62 (1987) 年、けやき通りは福岡市で最も若者に人気のある通りとして、一時は九州各地から客が集まった。店舗数も激増し、ピーク時には 400 店近くであった。沿道の地価も毎年 10% ずつ上がり、昭和 62 (1987) 年夏頃に地価

水準のピーク1,500万円~1,600万円/坪であった。

(3) 衰退期 (1988 ~ 1992)

テナント撤退

平成元 (1989) 年から、けやき通りが通りとしての一体性に欠け、高級イメージに寄り掛かって魅力アップの努力を怠っている間に、天神に「イムズ」「ソラリア」が誕生した。天神西通りが若者のまちとしても脚光を浴び、バブル崩壊とともにけやき通りへの客足は潮が引くように遠のいた。平成 4 (1992) 年頃、経済崩壊後の不況で、月百万前後のテナント料負担に耐え切れない店が増え、テナントが次々と撤退し、「貸し店舗」の張り紙が目立ち始めた。貸しビルはテナント料を大幅に下げるなど対策をとったが目立った効果は上がらなかった。このような状況の中でけやき通り商店会は会費集めもできず商店会は崩壊状態になった。

地価低落

平成 5 (1993) 年 9 月 20 日に発表された基準地価によって、けやき通りが前年と比べ 30% も下がり、商業地としては九州一の下落率となった。

(4) 復活期 (1993 ~ 現在)

けやき通り発展期成会成立

平成 5 (1993) 年、けやき通りの低迷状態を打破しようとマンションやテナントビルのオーナーや金融機関など、30 の法人を中心に通りの活性化と景観の維持・向上を目的にけやき通り発展期成会が成立した。

道路行政と住民の問題点

平成 5 (1993) 年 9 月 6 日、けやき通りで大型コンテナ車 (高さ 3.75 メートル) の上部がけやきの大枝と衝突、対向のトラックにも折れた枝がぶつかる事故が発生した。建設省国道工事事務所福岡西維持主張所が並木を調査し、7 月初め、3.5 メートル以下の数本の枝を切るなど、全面的な伐採に乗り出した。けやき通り発展期成会がこの伐採に対する「市民が育ててきた自然環境を大きく損ねる」という文書を同出張所

に提出した。出張所では、こうした心情を配慮して、3.8 メートル以下に基準を改め、それを超える高さの特殊車両は通行規制する方向で検討した。

新・日本街路樹百景

平成 6 (1995) 年、けやき通りが読売新聞創刊 120 周年記念企画「新・日本街路樹百景」に選定された。

けやき通り景観整備事業

平成 8 (1996) 年、建設省は「やさしさ推進事業」の一環として、けやき通り景観整備事業に着手した。照明、植栽、舗装部などの整備が行った。地元負担による国道の樹木のライトアップであるために、「全国でも珍しい」(期成会会長松田和実) と言える。けやき通り景観整備事業では、これまでにない官民が一体化した街路整備 (歩道部分) を行うことができた。この事業により平成 10 (1998) 年福岡都市景観賞を受賞した。

ボランティア・サポート・プログラム

平成 13 (2001) 年、道路を管理している福岡国道工事事務所が、市区町村等の協力を得て住民グループや商店街等の実施団体との契約を通して、植栽の剪定、草花の手入れ、散乱ごみ清掃などの地先管理の一部をまかせた。さらに、このような自分たちが住んでいる町をきれいにしたという気持ちを、形あるものにしようと考え出されたのが「ボランティア・サポート・プログラム」である。

緑陰道路プロジェクト

平成 15 (2003) 年、国道交通省は、良好な景観を形成し、温室効果ガスの吸収など大気環境への負荷を軽減するため、良質な緑の道路空間を構成する道路緑化を積極的に進めている。このために、国土交通省は街路樹を剪定せずに地域住民とともに緑陰道路を管理する「緑陰道路プロジェクト」に取り組んでいる。平成 15 (2003) 年 3 月、けやき通りは第一回モデル地区 (全国 25 地区) として指定された。

けやき通り街路樹検討委員会

平成 15 (2003) 年一般国道 202 号けやき通り街路樹検討委員会が成立した、けやきの高齢化による弊害が見受けられるため、道路に求められる安全性と景観の調和を図ることを目的とし、さらに、けやき通りにおける街路樹のあり方等を検討している。

2-2. 沿道地価の変遷

公共施設整備と地価には強い関連性が認められており、一般的に公共施設の整備後は周辺地価が上昇するといわれている。「みどりのある土地は、その土地の価値が高いのではなく、そのみどりは周辺の土地の価値を高めるのに役立つ・・・みどりによる価格の増加分は、ケースにもよるが、ゼロから 2~3% 程度と考えられる。」(吉野伸著「これが小さなまちづくり」により) また、不動産鑑定士のヒアリング調査では、けやき通りではけやき並木によって、通り独特の雰囲気、イメージの良さや顧客の通行量の増加など想定でき、地価を高める効果がある。

街路樹の沿道地価への影響を確認するために、街路樹が整備された道路と整備されてない(或いは貧弱な)道路の沿道の路線価を比較した。しかし、経済状況の変化による変動が大きく、また前述のように街路樹の影響は限られているため、顕著な結果が得られなかった。

2-3. 沿道建物のセットバック

けやき通りにおける環境向上を目指したまちづくり活動の客観的指標として、沿道建物のセットバック状況について調査した。

結果としては、道路に面する建物 73 棟のうち、セットバックしているのは 37 棟 (50.7%)。このうち、成長期と衰退期に建てられたもののセットバック率が高かった。成長期は 62.5%、衰退期は 63.6% であった。他に黎明期は 41.4%、復活期は 46.7% であった。セットバックの空間は植栽、店の看板、ベンチなどの演出がされているケースが多かった。

3. 考察

(1) けやき並木を活かしたまちづくり

昭和 33 (1958) 年けやきが植えられてから、沿道の住民や道路管理者が、けやき並木を活かした以下のようなまちづくり活動を行っている。

官民一体でのけやき並木のライトアップ 沿道住民による植栽の管理や街頭清掃などの活動 道路管理者や住民によるけやき並木の無剪定管理 けやき通り街路樹検討委員会による街路樹あり方の検討。

(2) 商店街と期成会のまちづくり活動の違い

商店街は若者を集めるために、多様なイベントを行い、一定の成果を上げた。一方、期成会はけやき通りの歩行空間の環境向上が結果的に人を集めると考えられ、けやき並木を活かして、ライトアップ、植栽管理など様々のまちづくり活動を行っている。

(3) 行政と住民の一体的なまちづくり

けやきの枝の伐採問題をめぐって、国道事務所と期成会が話し合っ、これをきっかけに、官民一体のまちづくりができるようになった。

(4) 街並みに合わせた建物

けやき並木を配慮して設計したシャトレけやき通りがきっかけとなって、街並に合わせた建物の建設が広がった。このように、街路樹は周辺建物のデザインに与える影響可能性がある。

4. 結論

けやき通りの事例を考察することで、道路整備を行う際には、「街路樹は道路の附属物」の視点で検討するのではなく、街路樹のまちづくりの中でのあるべき姿を明確すること、街路樹の管理については、道路管理者のみで街路樹管理を行うのではなく、住民参加を図る施策を行うことが重要であることが示された。

しかし、本研究はけやき通りの事例から得られた調査結果をもとに、街路樹のまちづくりへの影響について考察したに過ぎない。

今後は、他の街路樹を活かしたまちづくりに関して先進事例を対象として、研究を重ねていくつもりである。

A study of the effect on community activities by the street trees

Dafang Luo

In 70's, tree planting for living environment maintenance of inhabitants seems to be done as the noise and measures such as exhaust gas with a surge of a road environmental problem positively. The street trees are regarded as important from the viewpoint of road tree planting in road maintenance, and the quantity increases surely. The point what community improvement to carry out and what space it is made by the street trees are not fully examined.

In this research of Keyaki street in Fukuoka city, investigates the role of the street trees and the change of the route area by documents and hearing investigating to the person concerned. The purpose considers influence to the community activities of the street trees and to the clarity the figure which is in street tree's element.

As a result, it is the viewpoint of "street trees is the attached thing of the road" not examining in case road maintenance. The street tree's element in the community activities to definitely. And also, management of the street trees, do not manage the street trees only with the road manager, and do a measure to plan inhabitants participation. However, considered influence to community activities of the street trees for the cause in this study and the findings, and was provided from an example of a street. In future, intend for an advanced example about community activities that made use of other street trees in and intend to repeat a study.